

## 「REIC 防災セミナー（第 15 回）特別企画記念講演会」開催報告

REIC 防災セミナー（第 15 回）を 6 月 16 日（火）日本財団ビルにて開催しました。

この記念講演会は、定時総会開催後に特別企画として開催しています。今回は、東京大学地震研究所の古村孝志教授を講師としてお招きしました。



講演は、急遽「小笠原西方沖の深発地震—速報・解説」として 5 月 30 日に発生した小笠原西方沖 (M8.1、震源の深さ 682 km) 深発地震の話題提供の後に、「南海トラフ巨大地震—見えてきた？震源像—」についての講演がありました。

この地震は、震源の深さ (682 km) とその規模 (M8.1) において世界最大級であり、これまでに同地域で発生した深発地震の中でも一際 (200km ほど) 深かったこと、また、震源が深く、規模が大きかったことから、北海道から沖縄に亘り日本中で震度 1 以上の地震を観測する現象が起きました。深発地震の発生メカニズムは不明なことが多く、今後多くの研究者により解明が進められそうです。



発生メカニズムについては、今秋開催予定の日本地震学会で、多く発表されるだろうとのことでした。

「南海トラフ巨大地震—見えてきた？震源像—」の講演では、南海トラフ地震は、過去の記録が比較的多く残っており、100 年~150 年の周期で規則正しく発生すると考えられています。しかし、近年の解析・史料・シミュレーションに基づく新しい研究成果により、これまで考えられてきたより南海トラフ地震にはその発生様式に多様性があるということが分かってきています。多様性とは、同じ地域で発生した地震にも、主に津波を引き起こす低速滑りと、主に地震動を引き起こす高速滑りが存在するとの説明でした。また、過去には記録がなくても、先の東日本大震災を教訓に、発生し得る最大級の地震についても研究が進められており、新たな中央防災会議モデルでは、その最大級の地震に基づいた強震動対策や津波対策などが検討されています。今後もシミュレーションモデル (震源・地下構造) の精緻化により、地震動予測や津波被害予測の不確実性等を減少させる検討が進められるそうです。